

5 生 活 科

川崎一朗・佐和真由美

1 生活科でめざす自立とは

生活科の教科目標は、次のとおりである。

具体的な活動や体験を通して、自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身につけさせ、自立への基礎を養う。

この目標を受けて、子どもたちの「自立」を考えると、次の3つの側面からとらえることができよう。

(1) 生活上の自立 (2) 精神上的の自立 (3) 学習上の自立

具体的には

- ① 学級や学校という集団や社会の一員として集団生活ができる。
- ② 自分のことは自分であることができる。
- ③ 日常生活に必要な習慣や技能を身につけることができる。
- ④ 学習活動や集団生活において自分の考えや意見をはっきりと述べたり、自分の意志を人に伝えたりすることができる。
- ⑤ 人の話をきちんと聞き、自分の考えを深めることができる。
ということに置き換えて考えることができる。

2 本校生活科でめざす子どもの姿

自立という観点から、本校でめざす子ども像をあげてみる。

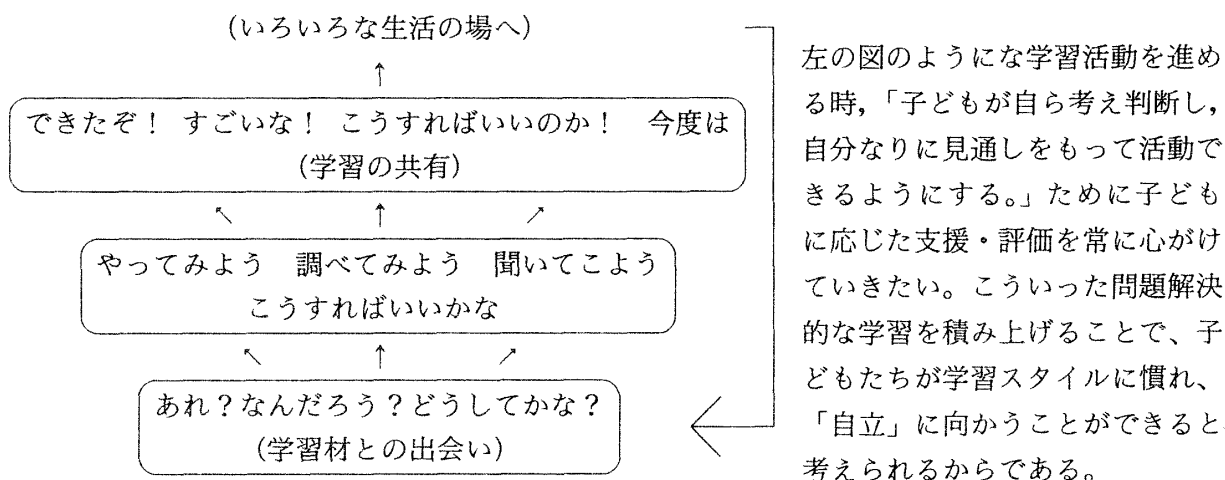
- (1) 具体的な活動や体験を通して知的な問いや実践的な欲求を見つける子ども
 - (2) 自分で見つけた問題について、自分なりに解決する方法を考えたり、試したりする子ども
 - (3) 自分で気づいたり感じたりしたことを豊かに表現する子ども
 - (4) 自分なりの考えをもち、考えに基づいて、判断したり、決定したりすることのできる子ども
 - (5) 自分や友達のしたこと（していること）をふりかえる子ども
 - (6) 生活科で活動したことを基に、自分の生活を自分で豊かにしよう、工夫しようとする子ども
- これまでの本校の一連の研究（「個が生きる授業の創造1988～1990」「個が生きる授業の評価1991～1993」「感性を育む 1994～1996」）の中で上記(1)(2)(3)(5)における成果がみられた。

これまでは、(4)(6)に焦点をあてて、問題解決的な学習過程のさまざまな場面で、子どもたちが自ら考え、決定する場を設けてきた。今年度は、さらに自己決定を生かし自分なりに工夫して活動していけるように実践研究を進めていきたい。

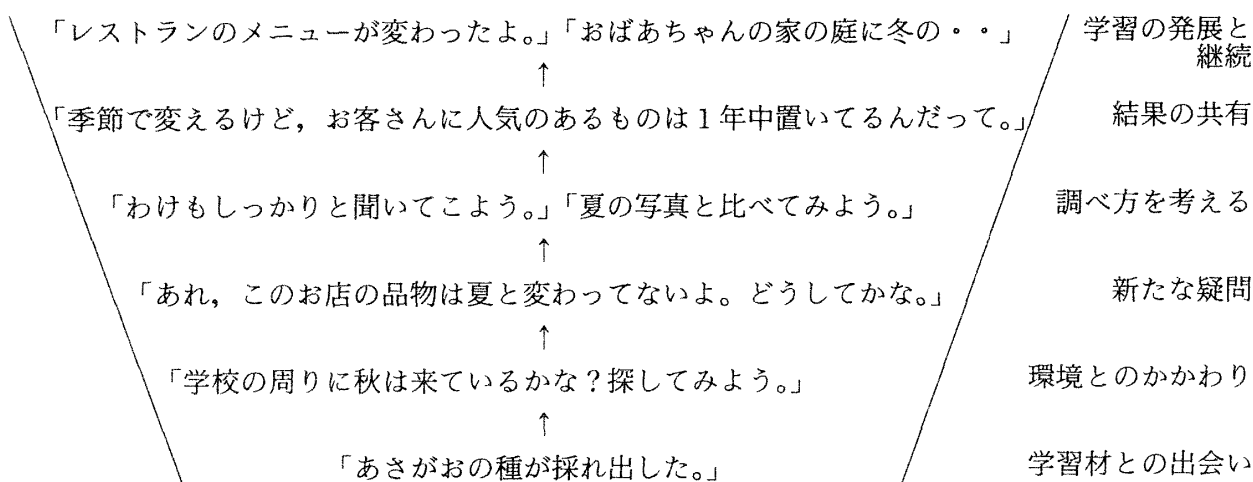
3 生活科における具体的な活動や体験とは

生活科における具体的な活動や体験は、結果を得るための単なる方法や手段ではない。それは、学習の内容であり、方法であるとともに、目標でもある。単によい結果だけを求めるのではなく、結果に至る過程を大切にしていきたい。それは、子どもたちが学習材と出会い、試行錯誤を重ねる

過程の中にこそ、子どもたちのさまざまな工夫や気づきが見られるからである。そして、この過程でそれぞれの活動が絡まり合い刺激し合うことで、子どもたちは、自ら考えを発展させたり活動の仕方を選択したりしていけると言えよう。こうした活動や体験を積み重ねていけば、その時々で充実感や有用感を味わうことができ、どのような結果でもそれをバネとして次への活動へ挑戦していこうとするであろう。こうして、子どもたちが、生活科からあらゆる生活の場へ活動を発展させていくことが、子ども自身の生活を豊かにしていくことにつながると考える。



4 具体的な授業の中で



5 総合的な学習との関連

総合的な学習は、「人とかかわり」「もの（自然）とかかわり」を通して、自分をみがき高めることをねらっており、生活科の学習を発展させていくものになっている。そこで、その基礎となる低学年では、問題解決的な活動の過程を大切に、ゆったりと考えたり活動に没頭したりする時間を十分に取りたい。そのためにも、学習を進めていながら年間指導計画の見直しを図っていききたい。子どもたちが「私はこうしたい。」という思いをもち、自分なりに試行錯誤を繰り返していく中で、さまざまな発見をし、活動の楽しさを味わい、次々と活動を発展させていけるように実践をしていきたい。

6 成果と課題

本年度は、前述の基本的な考え方の中から、(4)と(6)の2点に重点を置いて取り組んだ。2つの観点で振り返ってみたい。

(1) 自分なりの考えをもち、考えに基づいて、判断したり、決定したりすることのできる子ども

自己決定の場は、課題をつかむところから始まり、追求の場面や、まとめの場面でも設定することは可能である。多くの選択肢を与え、その中から選んでいくという自己決定の場面もあれば、追求の課程で、自然と生まれてくる選択肢も考えられる。いずれにせよ、指導者が「こうしなさい」と決めてしまうのではなく、子どもたちの様子を見守り、助言をしていく姿勢を大切にすることにより、子どもたちの自己決定能力は高まっていくのではないかと考える。

栽培活動を例に取れば、何を育てるのかという、活動の入り口から自己決定の場面は設定が可能であり、何をどう世話をするのかという追求の場面でも同じである。自己決定ができにくい場合は、友だちや指導者などにかかわりをもち、相談していく課程の中で自分の考えが次第に固まってくることも考えられる。自分の考えに基づいて世話をしたことについては、次への意欲を持続させることにもなると考える。例え失敗したとしても、その原因を探ろうとする意欲につながるものと思う。

複式学級では、2年生は、前年度の活動をもとに活動を見通して、自分なりのめあてを決めていく。そして、より工夫した活動方法を考えて1年生にアドバイスをしながら積極的に活動に取り組んでいく。2年生は、同じ活動をただ繰り返すのではなく、自分の力で活動の質を高めていくのである。また、1年生は2年生の活動が目標となり、その活動を見習いながら、自分なりの考えをもち行動し始めるようになる。指導者は、子どもたちの活動が絡み合い、自分たちで活動を振り返られるような場を設定し、共に活動を楽しむようにしていくことが大切だと考えている。

(2) 生活科で活動したことを基に、自分の生活を自分で豊かにしよう、工夫しようとする子ども

2つの活動をもとに振り返ってみたい。

① 栽培活動

一連の栽培活動を続けていくうち、植物に興味をもつ子ども、栽培の方法に興味をもつ子どもが多くなってきた。1年生のアサガオを見て、こんな世話をしたらいいのにとか、今年はどんな色の花が咲くのだろうかなど、様々な思いをもつ子どもが増えてきた。また、自分の育てた野菜をお母さんと一緒に調理をしたことで、料理の手伝いができるようになったり、この野菜を使った料理が食べてみたいという思いをもつ子どもも多くなってきた。

② 学校探検

2年生は、探検の仕方を1年生に教えることで、前年の自分たちの探検を振り返り、その体験をもとに新たなめあてをもつことができた。そして、それぞれが自分の興味関心に従って、自分の探検や方法を決めて活動に取り組んできた。お互いの活動を報告し合うお知らせタイムで、質問や気づきを発表していくことで、各自の探検を絡み合わせ、ここで自分の探検を振り返り、もっと上手に探検するためにはどうしたらよいか、自分なりに作戦を立てて意欲的に探検に取り組んできた。そして、家の近所や出かけた先にまで探検の目をもち続けるようになってきている。

生活科で重点を置いて取り組んだことは、「自分で決める場」を大切にした生活科の学習を行っていきうち、ある程度達成できたように思う。さらに自分自身の生活をより豊かにしようとする子どもたちを育てるために、いろいろな場面で気づき、決定できるような支援を常に心がけていきたい。また、自己決定の場面を多く設定することを意識した支援のあり方、そして、子どもたちが達成感をもつ学習材の開発をこれからも考えていきたい。